

## 敷居に立つヘスター・プリン

### 『緋文字』における性欲の感染\*

高野 泰志

『緋文字』には、病に関する言葉が多用されている。「病」を意味する“sick” (“sickness”、“sickened”を含めて)は14回、“disease”、“ailment”はそれぞれ5回と1回、「病的な」という意味の形容詞“morbid”は12回、「感染」を表す“pollution” (および“polluted”)は5回、“infect” (および“infectious”)は4回にわたって用いられる。そしてこれら「病」に係る言葉は、そのことごとくが性的逸脱の罪の隠喩として用いられている。そもそも作品の主題である姦通自体が非常に性的な題材であるが、チリングワースがディムズデイルの服を剥いで隠された緋文字を露わにするというレイプを思わせる行為<sup>1</sup>や、森の中でのヘスターが髪をほどいてディムズデイルを誘惑する場面など、ヴィクトリア朝的な隠喩や婉曲表現に隠しながらも<sup>2</sup>、おびたしい数の性に対する言及が見られる。これら性的逸脱の罪に対する考察は『緋文字』批評の根幹を形作ってきたが、本稿では罪が病の隠喩で語られることに着目し、当時の医学言説と文学言説が互いに互いを支え合いながら相互依存の状況であったことを明らかにする。そして罪が病の隠喩で語られることによって、その罪は「感染」するものであり、従って感染源たる罪びとは隔離されるべき存在として捉えられていることを論じる。また病、感染、隔離という図式の中で、ヘスターの性欲を感染源として敵視し、抑圧するメカニズムが働いていることを明らかにする。そういう意味で、『緋文字』はヘスターの性欲を抑え込む様を劇化した物語として読むことができるのである。そしてその図式を読み解くことで、ヘスターの人物像の持つ複雑性のひとつの要因を明らかにしたい。

#### 1. 病

『緋文字』において規範的な性行為を逸脱した「姦通」の罪は、様々な病の形をとって描かれる。作品が執筆されていた当時、アメリカ社会はしばしばコレラの流行や結核、梅毒などに襲われており、医学言説ではこれらの疫病は罪を犯したことに対する罰として描かれていた。スーザン・ソntagが病に関する研究の古典、『隠喩としての病』で述べているように、今日においても病を隠喩を取り除いたあるがままの姿で認識することは非常に難しい(Sontag 3)が、19世紀中葉のアメリカにおいては罪と病は不可分概念として存在していたのである。したがって物語の冒頭でヘスターが処刑台に立たされ、姦通の相手が誰かを詰問される場面で、彼女の魂が「汚されている」 (“in its pollution”)と書かれるとき(67)、この“pollution”という言葉は17世紀という舞台設定を超えて、当時の読者に特別な意味を伝えていた。もともとこの言葉は文字通りの「汚染」から精神的「墮落」までをさす幅広い意味をもった言葉であるが、とりわけホーソンが『緋文字』を執筆していた1849年には、猛威をふるっていたコレラの感染の原因として、さまざまな場所で目にする言葉だったのである。

コレラは合計3度アメリカ大陸を襲うが、その2度目の襲来(1848～49年)の際<sup>3</sup>、ホーソンはおそらくこの病を強く意識していたはずである。例えば1851年の『七破風の家』冒頭で描かれるモールの呪いが、あたりに充満する異臭や飲めば下痢を引き起こすモールの井戸水など、コレラの症状

を思わせるのは偶然ではないだろう<sup>4</sup>。またヨーロッパでコレラ勃発の知らせが届くと、大西洋に面したアメリカの各都市では、コレラ防衛のための大規模な隔離、検疫政策を実施した。『緋文字』執筆直前までセイラムの税関官吏であったホーソーンは、いわばヨーロッパから押し寄せるコレラ防衛の最前線にいたのである。

19世紀中葉、神への信頼がゆらぎ始めた時代、疫病などの社会的脅威はなおさら神への不信心の結果と見なされ、疑似宗教言説で語られることになる。その結果、本来たんなる生物学的病に過ぎないはずのコレラは、罪を犯したことに対する罰と考えられた。歴史家チャールズ・ローゼンバーグはコレラの歴史を書いた著書で、当時の見解を以下のようにまとめている。

コレラとは神の意志によって引き起こされたものである。1832年に流行した時と同様、1849年にも、あらゆる宗派の敬虔な信者たちはコレラが物質主義と罪とにまみれた国にぴったりの懲罰であると認めていた。アメリカ人の中にはコレラが貧乏人と罪深い人だけを襲うのだという意見に表向き反対していた者もいるが、それでも飲酒、無分別、過剰な性欲が及ぼす悪しき結果について噂をしていた。コレラを防ぐのに精神的手段はなくてはならないものだったのである。(Rosenberg 121)

病を不道徳に対する罰であるとみなすこのような考え方は、ホーソーンによる罪の子パールの描写にはっきりと反映されている。「パールが[自分をからかう子供たちを]荒々しく追いまわす様子は子供の姿をした悪疫(infant pestilence)に 猩紅熱(Scarlet fever)があるいはまだ羽も生えそろわない裁きの天使か何かに 似ていた。そして次代を担う若者たちの罪を罰することをその使命としているのだ」(102-103)。まるでエドガー・アラン・ポーの「赤死病の仮面」を思わせるような描写であるが、人の姿をとる疫病が「若者たちの罪を罰する」というのは、当時人々が抱いていた「天罰としての疫病」のイメージそのものであった。

姦通の相手ディムズデルもまた、常に病的に虚弱であるが、その描写は結核を思わせる。体力が著しく衰える中、「知性の働きは当初のままの力強さを保ってはいた、いや、あるいは病だけが与えることのできる病的な活力を獲得していたのかもしれない」(159、強調は引用者)と述べられるが、ソntagが「病の働きに関する撞着語法 熱のある活動性、情熱的な諦め は結核の典型と考えられていた」と述べるように(Sontag 12)、この状態は当時の結核を描く文学的表象の典型である<sup>5</sup>。またソntagは「結核感染には性欲をもよおさせる働きがあり、激しい性的魅力をその人に与えるのだと考えられた」とも述べているが(Sontag 13)、結核に関する神話の中でも、結核患者特有の蒼白い顔色は性的魅力を持つとされていた<sup>6</sup>。説教をするディムズデルの声は、その罪のせいで不思議な共感作用があり、内容とは関わりなく聴衆の心にたちどころに共感を呼び起こすが(67、142、243)、罪ゆえの共感作用と、病ゆえの性的な魅力はそれほどかけはなれてはいない。

ソntagによると結核は「両極端をゆれ動く」病であり、普段は虚弱な患者に「一時的に多幸症を引き起こし、食欲を増進させ、性欲を増大させると考えられた」(Sontag 11, 13)。この一時的な多幸症、食欲の増進、性欲の増大が『緋文字』にも描かれている。物語終盤、森でヘスターと出会い、ヨ

ーロッパに脱出するようヘスターに説得された後、ディムズデイルは「ひどく感情が高ぶり、いつになく体力に満ちあふれ」(216)で、まるで別人のように見える。自分の部屋に帰り着いたディムズデイルはその後、「選挙祝賀説教」の原稿を書き始める。

ひとりきりになって、牧師はその家の召使いを呼び出し、食事を求めた。食事が目の前に並べられると、彼はむさぼるような食欲でそれをたいらげた。それから選挙祝賀説教のすでに書き終えたページを暖炉に投げ込み、すぐさま別の原稿を書き始めた。思いついた考えや感情を衝動的に、流れるままに書き留めていたので、神の啓示を受けたのではないかと考えたほどであった。ただ不思議だったのは、神の言葉の崇高かつ荘厳な音楽を伝達するのに、自分のような穢れたオルガンパイプを通してするのが適切であると、天が考えたことである。しかしその謎は自ずと解けるに任せ、あるいは永遠に解けぬままにしておき、牧師は熱烈な性急さと恍惚の中で、自分の仕事を先へと進めた。このようにして夜はまるで翼を持った駿馬のように、瞬く間に過ぎ去り、その駿馬を操るのもまた牧師その人であった。朝が訪れ、カーテンの隙間から恥ずかしそうに覗き込んだ。ついに夜明けが黄金の光を書斎に投げ込み、その光がまともにつつかって牧師の目をしばたかさせた。ほら牧師がそこに。いまだペンを指の間に挟み、その背後には書き終えた紙が膨大で計り知れないほど広がっている！(225、強調は引用者)

これまでの虚弱な描写からは考えられないほど、ディムズデイルは別人のように見え、「むさぼるような食欲」で夕食をたいらげる。ソクタグのいう「性欲」には一見触れられていないようだが、ただひとり部屋に閉じこもり、一心不乱に「熱烈な性急さと恍惚の中で」文章を書く「穢れたオルガンパイプ」、ディムズデイルの姿には、急激なスピードで『緋文字』を書き上げる作者ホーソーンの姿が重ね合わされるのみならず、「ペン(=ペニス)を指の間に挟む孤独なマスターベーションの姿が透けて見えてくる<sup>7</sup>。T・ウォルター・ハーバートも触れているように、19世紀のアメリカではマスターベーションに関する言説が爆発的に増大した時期でもあった(Herbert 190-91)。1712年に書かれた古典的な書物『オナニア』がマスターベーションの危険性を訴えて以来、マスターベーションは徐々に医学的言説に組み込まれ始める。19世紀にはマスターベーションを行えば身体を消耗させ、狂気や盲目を引き起こしてしまうのだという説が現れたために、この行為がひとつの「病」として捉えられるようになったのである(Friedman 85-102)。また、先ほど触れた“pollution”という言葉には「汚染」「墮落」といった今日用いられる意味以外に「精液を体外に放出すること」を意味していた<sup>8</sup>。そういった社会的状況を考慮に入れるならば、上に引用したディムズデイルの姿は、森でヘスターに誘惑された牧師が自らの性欲を解放している場面と読むことも可能である。

キャロル・マリア・ベンジックは、「ラパチーニの娘」を新歴史主義的に分析し、作品に現れる病の症状が梅毒である可能性を示唆した。しかし作品中の症状から病名を特定すること自体が重要なのではなく、19世紀の「お上品な伝統」が支配するアメリカでは、性欲が病という隠喩でしか語ることができなかった、ということの方に注目すべきであろう。だからこそホーソーン作品においてはさまざま

まな病の症状が混在しているのである。当時の医学的言説が、疑似神学的言説を活用しながら病を罪の隠喩でくるむ一方、『緋文字』のような文学言説が逆に罪を病の隠喩で描いている。19世紀においては、医学言説と文学言説が互いに互いを支え合い、補強しあいながら、性欲という罪が病そのものの原因であり、かつ結果であるという認識を再生産し続けていた。このことは、当時の「お上品な伝統」のもとでは直接語るることのできなかつた性欲を語るための手段を、ホーソーンに与えることにもなったのである。

ここでホーソーン自身が語ることを許されない性欲を描くために、病の隠喩を用いたのだと考えてはならない。比較的性の解放された時代に生きる我々の視点からすると、19世紀の作家は描くことの許されない内容を隠喩に隠して語っているのだと考えがちであるが、性的なものを隠蔽するイデオロギーが強力に作用していた時代、表象を許されない「下半身」の領域は、ホーソーンにとって抑圧されていたというよりはむしろ不可視のものであり、認識すること自体を困難にしていたはずである。性が病の言語で語られるということは、ホーソーンにとって性欲が何より病として認識されていたということを表している。だからこそ、自分の用いる病という隠喩に引きずられ、ホーソーン作品においては、性欲は感染する。

## 2. 感染

『緋文字』において、ヘスターの最大の罪とは、たんに男性を引きつける性的魅力を持っているというだけでなく、自らの意志でディムズデイルを誘い込む自発性にある。近年、この作品を当時のポピュラーな小説と比較する研究が盛んであるが、物語の構造上は男性が女性を婚姻外の性的関係に誘い込む誘惑小説に似ていながら、『緋文字』においては、むしろ誘われるのが男性であるディムズデイルの方であり、ヘスターは強い意志を持って男性を誘う女性である (Kreger 310)。つまりピューリタン社会において最も危険なのはヘスターの性的魅力のみならず、ヘスターの性欲である。ヴィクトリア朝的隠喩に隠されながらも、作中で何度もヘスターは自らの「穴に潜む蛇のような」(80) 性欲を抑えつけている様が描かれる。「贖罪の行為」(penance) を行いながらも「悔悛」(penitence) は果たしていないとされるヘスターは、ひとり静かに針仕事に励む。

女は、男には理解しがたいことだが、繊細な針仕事に喜びを見出すものである。ヘスター・プリンにとってそれは人生の情熱を表出し、ゆえになだめる方法であったのかもしれない。他のすべての喜び同様、ヘスターは情熱を罪として退けた。些細な事柄にも病的に良心を干渉させるこの状態は、真の揺るぎない悔悛を導くものではなく、奥底ではなにか疑わしいもの、ひどく誤ったものを導くのではないだろうか。(83-84)

「情熱」(passion) は「性欲」を指し示す婉曲語法であり<sup>9)</sup>、ひとり針仕事に励みながら「情熱」を表出し、なだめるヘスターには、どこか先に見たマスターベーションをするディムズデイルにつながるものが見て取れる。緋文字を胸に付け、セクシャリティの象徴である髪を帽子に隠し、「ヘスターの身体は、威厳があり彫像のようでありながらも情熱が抱きしめようと思うようなものは何もなかった」ように見えるが(163)、実際には「その情熱はかつてあれほど激しく燃えさかり、今でも死に絶えたわけでも眠

っているわけでもなく、同じ墓場のような心の内側に閉じ込められているだけ」であり、「[緋文字が]彼女の心を厳しく監視していたにもかかわらず、新しい悪徳がそこに忍び込んだか、あるいは昔からの悪徳が追い払われてはいなかった」と語られる(180-81)。表面的には「贖罪」を行い、性欲を追い払ったように見えながら、たんに性欲を抑圧しているに過ぎず、したがって「悔悛」には至っていないのである。自分の性欲を意識するからこそ、ヘスターの「自意識の強い心は疑いなど感ぜられない場所に疑いを見出し」(182)、屋内ではデイズデイルとふたりきりになることを拒むのである。

ピューリタン社会の人々がこのヘスターの性欲の「感染」を恐れていたことは、さまざまな箇所に見てとれる。例えばヘスターの卓越した刺繍の腕前は、「花嫁の汚れのない、赤く染まった頬を覆うためのベール」のために用いられることは許されない(83)。それはもちろんヘスターの犯した姦通の罪、性欲の逸脱が、「汚れのない」花嫁に感染することを恐れているからである。若い女性はヘスターから目をそらせるが、それは「一瞬でも目が合うとその清純さがいくぶんか汚されてしまうかのように」感じるからである(87)。またチリングワースが本名を隠すのは、罪を犯す以前に親しくしていた者にも「恥辱が感染」するからである(118)。ヘスターが罪を犯したが故に復讐の鬼と化したチリングワースは、実際にヘスターの罪に感染してしまったと考えられるだろう。デイズデイルもまた、ヘスターによって姦通に誘い込まれたという意味で感染者である。森でヘスターに誘惑された後で、出会った信徒たちにその罪深い考えを次々と吹き込もうとする姿(217-20)は、先ほど見たパールと同様、町を突風のように襲う疫病に見立てられている。デイズデイルが疫病の感染者と化したのは「これまで一度もなかったことだが、幸せになれるという夢に誘惑され、自らの意志で選び取って致命的な罪(deadly sin)だと分かっているものに身をゆだねてしまったのだ。その罪の伝染性の毒(infectious poison)はこのように素早く彼の心全体に行き渡った」(222)からである。

ヘスターの娘のパールもまた、ある意味でその罪の感染した子供であると考えられる。パールの奇妙な性格は、「パールが魂を精神世界から吸収し、肉体を地上の物質から吸収」しているさなかにヘスターの精神状態が危うかったためであり、「母親の激情あふれる状態が媒介となって、いまだ生まれぬ幼な児に心の活動の光が伝達されてしまった」ためであると説明される(91、強調は引用者)。この描写は18世紀末あたりから大きな社会的問題となっていた、「先天性梅毒」(梅毒の母胎内感染)を思わせる<sup>10</sup>。母親の状態(特に望ましくない状態)が胎児に「吸収」(imbibe)され、「伝達」(transmit)されるといった表現を読めば、当時の読者は間違いなく先天性梅毒を連想したはずであり、その連想は作品理解に大きな影響を及ぼしたに違いない。つまりヘスターを感染源として、来るべき世代へと病が感染していく様が描き出されているという印象を与えるのである。

現実的な恐怖と不安の中で、先天性梅毒に関する言説は、19世紀後半には大きな文学的潮流へと変化していく。いわゆる梅毒文学とでも名付けられるべき文学ジャンルが登場し、そこで社会問題としての梅毒が無数に描き出されたのである。19世紀末の梅毒文学を論じたエレーヌ・ショワルターは、梅毒文学を書く作家を男性と女性とに分け、それぞれ敵意を向けられる対象が男性の場合と女性の場合とで全く異なっていることを指摘しているが、「男性作家の作品では、女性こそが敵であった。例えば魔性の女が男性を性的誘惑に誘い込み、破滅させてしまったり、不感症の妻のせいで夫が売春宿へと追いやられたり、清教徒の女性作家や女性読者、女性評論家のせいで男た

ちの芸術が骨抜きにされてしまうのである」(Showalter 88)と述べている<sup>11</sup>。ここには女性が性欲を持って、男性の性欲を受け入れなくとも、諸悪の根源をすべて女性に押しつけようとするメカニズムが見て取れる。これはハーバートの「二重の結婚」説と照らし合わせると、非常に示唆的である。ハーバートは、ヘスターが社会的にはチリングワースと結婚していたが、魂の結びつきという観点からはディムズデイルとも婚姻関係が認められる、そういう意味でディムズデイルと姦通を犯しながら、同時にチリングワースとの関係も姦通とみなすことができると論じている(Herbert 187)。この説を踏まえると、ヘスターは、ディムズデイルに対しては森での出会いの場面が象徴するようにショワルターの言う「男性を性的誘惑に誘い込む魔性の女」であり、同時にチリングワースに対してはディムズデイルに復讐心を燃やすきっかけを与える存在として「夫を悪の道へと追いやる不感症の妻」でもある。つまりディムズデイルもチリングワースも、ともにヘスターによって罪へと誘われるのであり、そういう意味で二重に「敵」として表象されているのである。このように『緋文字』においてはヘスターの罪が感染源として捉えられ、ヘスターの持つ性欲そのものが感染の恐怖を引き起こしている。そしてその疫病としての罪・性欲は、当時のコレラ対策がそうであったように、安全圏に「隔離」されなければならない。

### 3. 隔離

『緋文字』とは、そもそも危険の対象である性欲を隔離するための物語と読める。その最大のシンボルが、ヘスターの胸にある赤いAの文字であることは言うまでもない。これまでヘスターが胸につける赤い文字の元となった歴史的事実に関してはさまざまな研究がおこなわれてきた<sup>12</sup>。そして『緋文字』の舞台設定や時代設定と正確には整合しないものの、セイラムやニュー・プリマスで姦通を犯した者が腕ないしは背中にAやADと書かれた布を貼らなければならないという法律が実際にあったことは広く知られている。また1897年に書かれたアリス・モース・アールの刑罰史には「緋文字」と題する章があり、酔っ払いに貼られるDの文字など、体にアルファベットを貼る刑罰の例を数多く抜き出している。そしてその起源は今となっては分からないとしながら、最終的には14世紀のイギリスにまでさかのぼっている(Earle 86-95)。

アールは刑罰についてのみ書いているが、しかし身体に文字を貼り付けるという習慣は、刑罰に限られるわけではなく、もっと実際的な目的に用いられたこともあった。それは中世ヨーロッパの癩病患者に対する「烙印」である。ソウル・ナサニエル・ブロディによる癩病の研究書によると、癩病は当時性病であると信じられ、患者は「性行為への欲望で身を焦がし、その「墮落した邪悪な行為のために社会を脅かす存在」であるとみなされていたが(Brody 52)、癩病の感染を恐れていた民衆は「癩病患者が近づいたことを警告する」ために「ガラガラやカスターネット」、あるいは「手や靴に結びつけられた鐘」を持たせ、「服装が裁断の仕方や色で区別できるようになっていた」という。その例として「フランスでは赤いLの文字を刺繍した灰色や黒の服」が挙げられている(Brody 67)。不道德と病が感染するのを避けるため、罪人／患者に烙印を押すという図式は、17世紀ニューイングランドの法律と同じである。またブロディは癩病患者たちの隔離された住居について次のように述べる。「服装とさまざまな器具を身につけ、癩病患者は隠遁所のある場所に追いやられた。大抵は町の外の広々とした野原にたてられたあばら屋であった。そのあばら屋の敷居で、癩病患者はこう

言わねばならなかった。『この隠遁所は私のものである。私は自らの選択で常にここに住むのである』(Brody 68)。ヘスターは特に行動を制限されているようには見えないかもしれないが、「街の外れ」の「小屋」(81)に自ら赴き、町中に入るときにはAの文字を身につけることで罪人であることを示さなければならないという点で、癩病患者の置かれた状況と酷似している。

ここでホーソーンがこの時代の癩病患者の習慣を知っていたかどうかは重要ではない。癩病患者を印しつけるこういった習慣が17世紀のニューイングランドでの刑罰にまで脈々と受け継がれており、そこには共通の構造があるということに注目すべきなのである。上記の引用でも分かるように、癩病患者の服装や道具は、周囲の人々に近づいてきたことを警告するためのものであり、つまりは感染を防ぐための方策であった。したがって胸に文字を貼り付ける習慣とは、単に罪びとを辱める刑罰なのではなく、罪を囲い込み、ほかの人々と区別し、危険であると名指すためのシステムであったということなのである。

ブロディは他の箇所でも「司教や牧師は癩病を精神的墮落の隠喩として用いた」(Brody 61)と述べているが、癩病患者は人々がそこから道徳を学ぶべき対象であった。ヘスターもまた「説教者や道徳家が指さして、そこに女の弱さや罪深い情熱の一例を生き生きと蘇らせて見せ、具体的に説明するための一般的な象徴」(79)として扱われている。このことから明らかなように、赤い文字を胸に貼り付けることで、ヘスターの情熱(性欲)そのものが危険な感染源として囲い込まれているのである。そう考えると、デイズデイルが密かに胸にまとっていたAの文字は、実際、人の目にさらされていないという点で「隔離」の機能を果たしていない。

ヘスターは帽子の中に豊かな髪を隠していることが描かれるが、これもまたヘスターの危険な性欲を囲い込むためであることは言うまでもない。ヘスターは森の中の有名な場面で、それまで胸に貼ってあったAの文字を取り去ると同時に髪をあらわにし、一気に抑圧していた女性性を解放する。ヘスターの女性性は、この瞬間までは胸の赤い文字によって名指され、隔離されていたが、ここでその隔離の囲い込みを破り、安全圏から逸脱してしまうのである。文化人類学者のデズモンド・モリスは、西洋での女性の髪がもつ象徴性を以下のように説明している。

長髪にした女性が直面する特別の問題があった。それは、長く伸ばした女性の柔らかい髪は、絹のような肉感的な手ざわりがするので、性的に抑制された社会では挑発的すぎるという問題である。ピューリタンはその官能性を憎んだが、さりとて切り詰めることを求めることはできなかった。なぜならそれは女性らしさを奪い、ひいては聖パウロが託宣した神の掟にそむくことになるからであった。(モリス 38、一部改訳)<sup>13</sup>

ここでモリスはまるで『緋文字』に関して述べているようである。髪を持つ「官能性を憎みながらも切ることを求められなかった」のは当時のヴィクトリア朝のダブルスタンダードを、つまり当時の男性たちは女性の性欲を憎み、敵視する一方で、それを必要ともしていたということを指し示している。同様にヘスターの性欲も「説教師や道徳家が指さす象徴」、つまりピューリタン共同体の人々にとっての罪の象徴として、消し去られることなく安全圏に囲い込まれた形で存在させられるのである。

『緋文字』はこの女性の持つ官能性、性欲を封じ込める力学を劇化している。『緋文字』には繰り返し「境界線」(border)、「敷居」(threshold)、あるいはヘスターを囲む「魔法の輪」(magic circle)など、区画・隔離を意味する単語が頻出する。そもそも物語の冒頭は「処女地の一部を墓場に、別の一部を刑務所に割り当てる(allot)」、必要性について語り、「最初の埋葬地を区画した(mark out)」ことを説明するところから始まっている。つまり罪人と死者を隔離することで物語は幕を開けるのである。「物語の敷居で」読者に差し出される薔薇の花もまた、監獄の「敷居」に咲いていたものであり(48)、ヘスターは監獄の「敷居」で立ち止まり(52、78)、看病していた病人の家の「敷居をまたいで」立ち去り(161)、ディムズデイルと心の「敷居を」越えて交わる(190)。またディムズデイルの想像の中で町の人々は家の「敷居」に立って処刑台に立つディムズデイルの姿を見る(152)。『緋文字』の中で最大の罪は、チリングワースの「人間の心の聖域を侵犯する」(195)行為であるが、これもまた「敷居を越え」(137)る行為として描かれる。

物語中盤でヘスターを記しづける A の文字は、<sup>パール</sup>真珠の色のように変幻自在に意味を変え始め、たとえば病人を看病するヘスターの「有能さ」(Able)を表す記号と解釈される。一見緋文字が隔離の機能を果たしていないように思えるかもしれない。しかし表面的にどのような意味を帯びようと、この緋文字がそこに決して口に出すことを許されない、隠蔽されなければならない何かがあることを指し示す記号として存在することには変わりはない<sup>14</sup>。だからこそ「薄暗い夕暮れが、彼女に同胞と交わりを維持する資格を与える媒介であるかのように」、「彼女を招き入れることができたのは暗くなった家だけだった」のであり(161)、あくまで光の当たらない隠された領域でのみ共同体の人々と交わることが可能なのである。

最終的に物語は年取ったヘスターがヨーロッパから戻ってくるところで終わる。

敷居でヘスターは立ち止まった。少し振り返った もしかするとひとりきりで、そしてあまりにも変わり果てた、かつてあんなにも張りつめた生活を送った家に入ることが、耐え難いほどにわびしく陰鬱であるように思えたのかもしれない。しかしヘスターのためらいは、その胸に緋文字があることを明かすに十分ではあったものの、ほんの一瞬のことではなかった。

ようやくヘスター・プリンは戻ってきた、そして長らく見捨てられていた恥辱を再び取り上げた。しかし幼いパールはどこに行ったのだ。まだ生きているのなら、今やパールは女性性の花咲く絶頂期にいたに違いない。(261-62、強調は引用者)

小屋の「敷居で」立ち止まるヘスターは、彼女のために確保されていた隔離領域のことを読者に強く意識させる。そして非常に意味深いのが、今や「女性性の花咲く絶頂期に」いるパールが帰還を許されていないということである。もはや絶頂期を過ぎて性欲の持つ危険性を失ったヘスターのみ帰還を許され、パールが作品から消えてしまうことは示唆的である。ヘスターの性欲の感染者、ディムズデイルが死に、チリングワースが「人間の視界から姿を消し」(260)、パールが共同体の外部に追いやられたとき、やっと物語世界は平和と安全を確保することができるのである。



『緋文字』の序文「税関」でホーソンは「中間領域」(“the neutral territory”)を描くといひながら(36)、物語は区画・隔離へと向かう。ヘスターという境界線をさまよう非常に魅力的な女性登場人物を描きながらも、物語(緋文字)は境界線を越えることを断罪し、その女性性を抑圧・隔離しようとし、最終的には非女性化してしまうのである。このような中間領域を描こうとしながらも隔離に向かうホーソンの姿には、どこか境界線を越えることに対する恐怖感に突き動かされている様が見えてくる。つまりホーソンは性欲を持つ女性を封じ込め、隔離しようとする物語を描くことで、性欲を描きながら性欲を無効化しようとしているのである。

#### 4. 結論

そもそもホーソンがヘスターの隔離を描かなければならなかったのは、ホーソンにとってヘスターのような欲望を持つ女性が危険であると認識されていた証左に他ならない。そしてヘスターを危険であると認識していたのは、ホーソンの中にヘスターのような女性に対する欲望が潜在していたからでもある。欲望しながらもその欲望を罰しなければならないというこの矛盾が端的に現れているのが、先に引用した選挙祝賀説教の原稿を書くディムズデイルの姿である。「書くディムズデイル」が「書くホーソン」を投影した姿であることは間違いないだろう。その「書くディムズデイル」に無意識のうちに「ヘスターを欲望するノマスターベーションをするディムズデイル」の姿が描き込まれているとするならば、その場面を書くホーソンにもまた、ヘスターのような危険な女性を欲望する姿が見出されなければならない。ホーソンはディムズデイルの性欲の罪を描きながらそれを罰し、抑圧することで、そして性欲の対象である女性を非女性化することで、実は自らの性欲を抑圧したかったのではないだろうか<sup>15</sup>。

欲望しながらもその欲望を抑圧しようとする矛盾が、ホーソンに「性欲」を病のメタファーで語らせたのである。あるいはむしろ「性欲」こそがホーソンに作品を書かせていたというのは言い過ぎであろうか。作品に人間精神の深みを描くという文学的創造が、ホーソンの中で「心の聖域を侵犯する」チリングワースの行為につながるように、『緋文字』という作品そのものが、作品を生み出す欲望そのものに批判的に立ち返ってくる。欲望の対象であるヘスターは、この矛盾する欲望の中で生み出され、描き出された。作者ホーソンのこの矛盾した欲望のために、『緋文字』におけるヘスターは、いかに作者がテキスト上で罰しようとしても、作者のコントロールを超えて著しい魅力を獲得している。

これまでヘスターの人物像に関しては、肯定的なものから否定的なものまで多様な批評を生み出してきた。ヘスターに関する論文集を編纂したハロルド・ブルームは、その序文で「[ヘスターが]『緋文字』そのものと比べても並はずれて関心を集めてきたのは、チリングワースや空想的なパールはもちろんのこと、ディムズデイルよりも逆説を、あるいは自己矛盾さえも体現する人物であるから」と述べている(Bloom 1)。チリングワースやディムズデイルよりも複雑であるかどうかに関しては異論があるが、この「逆説」、「自己矛盾」こそがヘスターの魅力であることは間違いないだろう。フレデリック・カーペンターは1944年の論文で、「『緋文字』の偉大さはヘスター・プリンの人物造形にある。あえて自ら確信を持ち、新世界で新しい道徳を確立する可能性を信じたために、ヘスターは人間の弱点にもかかわらず、ピューリタン社会の偏見にもかかわらず、そして最後に彼女を作

った作者の偏見にもかかわらず、精神的偉大さを獲得したのである。(中略)ホーソーンに非難されているにもかかわらず、ほとんど理想的な人物となりおおせているのである」と述べている(Carpenter 69、強調は引用者)。作中でホーソーンはヘスターの思想を危険視し、その価値観を否定しているが、それにもかかわらずヘスターの人物像が作者ホーソーンの意図を越えて息づいていることをカーペンターは指摘している。いかに罪の病に感染した患者として描かれようと、半世紀以上も前にカーペンターが指摘したように、ヘスターが作者のコントロールを越え、病の隠喩を突き破って生命力を持っているという印象は『緋文字』の読者の多くが共通して感じていることではないだろうか。カーペンターからおよそ60年近くを隔ててブルック・トーマスが警告するように、あまりに強い生命力を帯びたヘスターのせいで、森の中でディムズデルがヘスターに出会う場面が「あまりにも強力な場面なので、その本を教えた経験のあるものなら誰でも知っているように、語り手が実は恋人たちの意見を糾弾しているのだということが分かる文章を慎重に学生に示してやらなければならない」(Thomas 186)のである。

このようにヘスターが読者をひきつける大きな原因のひとつは、自らを突き動かす欲望とその欲望を抑圧しようとする衝動との矛盾に引き裂かれたホーソーンが、ヘスターの造形を十分にコントロールできていないことにあるのではないだろうか。ホーソーンは危険な魅力を持つヘスターのような女性を欲望していたにもかかわらず、それを意識下では認めることができなかった。そのためにホーソーンのコントロールがヘスターの人物造形に十分に及ばず、作者の予想しなかった生命力が生み出されてしまったのである。その結果、ヘスターがいかにテキスト上で隔離・抑圧を試みられたとしても、その魅力は読者に「感染」してしまうのである。

#### 註

\* 本稿は日本ナサニエル・ホーソーン協会九州支部例会(2007年12月1日)で発表した内容に加筆修正を施したものである。

<sup>1</sup> 丹羽隆昭は「意識もおぼろな牧師の着衣を剥がし、『真実』を見出して狂喜する医師は、催眠術師の役割を帯びるとともに、同性間におけるレイピストという役をも果たしている」と述べている(23-24)。

<sup>2</sup> レスリー・フィードラーは「アメリカ文学の偉大な作品群の中では珍しく、セックスは『緋文字』の中心に存在しているが、目立たなく隠されているために清純なとまでは言わないまでもほとんど清純に見えるほど分かりづらくなっている」と述べている(Fiedler 228)。

<sup>3</sup> 1度目は1832年の夏、2度目が1848年から49年にかけての冬、その後1854年まで断続的に出現した後、突如姿を消し、1866年に3度目のアメリカ大陸上陸を果たす(Rosenberg 1-9)。この1832年から1866年という期間がホーソーン作品執筆時期とほぼ一致するのはなかなか興味深い点である。

<sup>4</sup> 例えば「モールの罪の恐ろしさと醜悪さ、そしてその罰の悲惨さは、漆喰を塗ったばかりの壁を黒ずませ、古くて物憂げな屋敷に漂うような臭気がたちまちのうちに感染した」(HSG 9、強調は引用者)、「先に述べた井戸のわき水は汚れのないうまさをもまったく失ってしまった。(中略)モールの井戸水が塩辛い硬水になったことは明らかである。今でも変わっていないが、付近の老婆たちの言うように、そこでのどの湯きを潤そうものなら腸の病を引き起こすのは間違いない」(HSG 10、強調は引用者)など。臭気や感染といった言葉、汚水を原因とする腸の病(下痢)などはコレラの典型的な状況を表している。

<sup>5</sup> またソングは次のようにも言う。「結核は情熱の病気として称えられていただけでなく、抑圧の病気とも見なされていた。ジッドの『背徳者』の高潔な主人公は(ジッドが自らの物語であると考えてい

たことと対応して)本当の性欲を抑圧したが為に結核に感染する」(Sontag 21)。これもディムズデイルの置かれた状況に似ていると言える。

<sup>6</sup> 「結核は外見に関する作法であると理解されており、外見こそが19世紀の礼儀作法の基本となったのである。健康的に食事をするのは不作法とされるようになった。病的に見えるのが性的魅力があるとされたのだ。『シヨパンは健康であることが上品ではなかった時代に結核であった』とカミーユ・サン＝サーンスは1913年に書いている。『青白く血の気のうせているのが流行だった』(Sontag 28)。

<sup>7</sup> フレデリック・クルーズはディムズデイルの執筆が、性欲を抑圧し、それを「良心にとって受け入れやすい目的」に転嫁した結果であると主張している(Crews 148)。

<sup>8</sup> ちなみに『オナニア』の英訳タイトルは *Onania, or the Heinous Sin of Self-Pollution, and All Its Frightful Consequences in Both Sexes Considered, with Spiritual and Physical Advice to Those Who Have Already Injured Themselves by This Abominable Practice* である。マスターベーションが“Self-Pollution”と表現されている。

<sup>9</sup> 『緋文字』には passion あるいは passionate(ly)という言葉が合計 45 回にわたって用いられる。そのすべてが性に関するものではないが、語り手は「姦通」という言葉を用いる代わりに「情熱の罪」(a sin of passion)という表現をしていることから(200)、多くの場合「性欲」を指し示していることは間違いない。

<sup>10</sup> 19世紀後半を舞台にした『オペラ座の怪人』がその典型例である。1943年に映画化されて以来、怪人の顔の傷は後天的な負傷によるものと変更されたが、そもそもガストン・ルルーの原作は先天性梅毒に生まれついた主人公が五体満足に生まれてきた人々に復讐する話であった。つまり作品の書かれた1911年の段階においても、『オペラ座の怪人』がとりわけ人々に大きな恐怖を引き起こしたのは、18世紀以来の先天性梅毒が人々の意識の中にしっかりと根付いていたからにほかならない。Gilman 67-92を参照。

<sup>11</sup> 一方女性作家の場合は「世紀末の女性作家にとって、肉欲は父親たちの最も許すべからざる罪であり、性病はその罰であった。そしてその罰は不公平にも罪のない女性や子供たちまで共有しなければならぬものだった」と述べられている(Showalter 88)。

<sup>12</sup> ホーソーンが依拠した A の文字に関するさまざまな出典に関しては以下を参照。Dawson、Ryskamp、Newberry。

<sup>13</sup> 「聖パウロが託宣した神の掟」とは、聖書「コリント人への手紙」の一節であり、そこでパウロは女性の髪は長くあるべきものだという社会的規範を説いたのである。

<sup>14</sup> そもそもヘスターの「有能さ」とは病人に対する「共感する力」(161)によるものであり、その力は緋文字が与えたものであった。「[緋文字は]他人の心に潜む隠された罪に共感し、知る力を与えた」(86)。

<sup>15</sup> 丹羽は「もともと屈折した自我意識を持つホーソーンは、いつも創作を通して自己批判へと傾斜してゆく。ホーソーンの『許されざる罪』なる主題は、対象批判が自己批判へと変質してゆくところに大きな特徴があると言えよう」と論じている(25)。

#### 参考文献

Bensick, Carol Marie. *La Nouvelle Beatrice: Renaissance and Romance in "Rappaccini's Daughter."* New Brunswick: Rutgers UP, 1985.

Bloom, Harold. "Introduction." *Hester Prynne*. Ed. Harold Bloom. NY: Chelsea, 1990. 1-4.

Brody, Saul Nathaniel. *The Disease of the Soul: Leprosy in Medieval Literature*. Ithaca: Cornell UP, 1974.

Carpenter, Frederick I. "Scarlet A Minus." *Critical Essays on Hawthorne's The Scarlet Letter*. Ed. David B. Kesterson. Boston: G. K. Hall, 1988. 62-70.

Crews, Frederick. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes*. Berkeley: U of California P, 1989.

Dawson, Edward. *Hawthorne's Knowledge and Use of New England History: A Study in Sources*. Nashville: Van-

- derbilt UP, 1939.
- Earle, Alice Morse. *Curious Punishments of Bygone Days*. Chicago: Stone, 1897.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. 1966. Rev. ed. NY: Scarborough, 1982.
- Friedman, David M. *A Mind of Its Own: A Cultural History of the Penis*. NY: Penguin, 2003.
- Gilman, Sander L. *Health and Illness: Images of Difference*. London: Reaktion, 1995.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, vol. 1 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Columbus: Ohio State UP, 1962.
- . *The House of the Seven Gables*, vol. 2 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Columbus: Ohio State UP, 1965.
- Herbert, T. Walter. *Dearest Beloved: The Hawthornes and the Making of the Middle-Class Family*. Berkeley: U of California P, 1993.
- Kreger, Erika M. “‘Depravity Dressed up in a Fascinating Garb’: Sentimental Motif’s and the Seduced Hero(ine) in *The Scarlet Letter*.” *Nineteenth-Century Literature* 54.3 (December 1999): 308-35.
- モリス、デズモンド『ボディウォッチング』(藤田統訳)小学館、1992年
- Newberry, Frederick. “A Red-Hot A and a Lusting Divine: Sources for *The Scarlet Letter*.” *New England Quarterly* 60.2 (June 1987): 256-64.
- 丹羽隆昭『恐怖の自画像 ホーソーンと「許されざる罪」』英宝社、2000年
- Rosenberg, Charles E. *The Cholera Years: The United States in 1832, 1849, and 1866*. Chicago: U of Chicago P, 1987.
- Ryskamp, Charles. “The New England Sources of *The Scarlet Letter*.” *American Literature* 31.3 (November 1959): 257-72.
- Showalter, Elaine. “Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle.” *Sex, Politics, and Science in the Nineteenth-Century Novel*. Ed. Ruth Bernard Yeazell. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1986. 88-115.
- Sontag, Susan. *Illness as Metaphor and AIDS and Its Metaphors*. NY: Anchor, 1990.
- Thomas, Brook. “Citizen Hester: *The Scarlet Letter* as Civic Myth.” *American Literary History* 13.2 (Summer 2001): 181-211.